名古屋市道徳研究会　授業づくり研究部会

道 徳 科 授 業 研 究

令和４年10月28日（金曜日）

第６時限（14：15～15：00）

研究テーマ

誰もが安心して考えることができる道徳科の授業

―　実態に応じた個別最適な支援を通して　―

（光村図書出版『きみがいちばんひかるとき』５年「お客さま」より）

誰もが安心して考えることができる道徳科の授業
― 実態に応じた個別最適な支援を通して ―

Ⅰ テーマ設定の理由

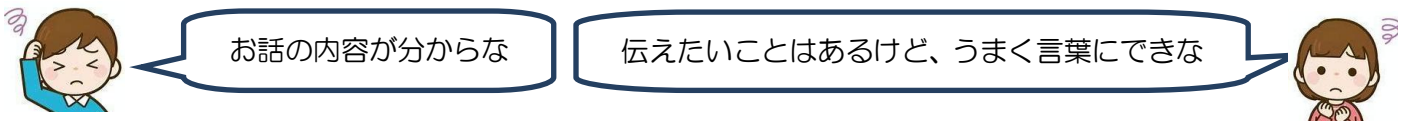
昨年度より、2020 年代を通じて実現を目指す学校教育の姿として「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することが、中央教育審議会から示されました。本研究会においても「道徳科における個別最適な学びと協働的な学び」をテーマとして研究・実践を進めてきた結果、新たな授業展開や指導方法が多く生まれました。

しかしその中で、本来学びの補助となる新たな授業展開や指導方法が、一部の子どもの困り感につながってしまったり、元々道徳科の授業の中で困り感をもっていたりする子どもがいることが分かりました。特に個別最適な学びを進める上では、これまで以上に教師が子どもの困り感の理解と実態把握に努め、きめ細かく支援していく必要があると考えます。「学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」においても「発達障害等のある児童生徒や海外から帰国した児童生徒、日本語習得に困難のある児童生徒等に対する配慮」が求められており、子どもの学習における困難さを想定した上で、指導上の工夫をする必要性が述べられています。

そこで本年度、授業づくり研究部会では「誰もが安心して考えることができる道徳科の授業」を目指して、子ども一人一人の実態を把握した上で、その実態に応じた個別最適な支援を授業に取り入れた研究を進めていくことにしました。

Ⅱ 誰もが安心して考えることができる道徳科の授業にするために

道徳科の授業は、誰もが伸び伸びと自分の考えを表現し、議論できる場であってほしいと考えます。しかし実際は、学習における様々な困り感を抱えてしまうことが原因となり、道徳科の授業において、安心して考えることができない子どももいます。



このように、教材文の内容がよく分からないため考えることを諦める、自分の考えをうまく伝えられないから発言しないなど、様々な困り感を抱える子どもへの支援に悩んだ経験があると思います。では、誰もが安心して考えることができる道徳科の授業にするには、どのような手立てや活動を取り入れるとよいのでしょうか。

本研究部会では、まず道徳科の授業における学習活動において、困り感の実態把握を行い、部会の中で共有しました。その上で、それぞれの学級における様々な困り感の実態に応じて、どのような個別最適な支援が有効であるかを話し合い、授業の中に取り入れていくことにしました。そうすることで、子どもの困り感を軽減し、学級の誰もが安心して考えることができる授業となると考えました。

Ⅲ　実態に応じた個別最適な支援とは

部会において、子どもの困り感を共有すると、どの学級においても、「教材を理解する」「考えを共有する」「考えを表現する」という３つの活動においての困り感が多いことが分かりました。そこで本部会では、それぞれの困り感に応じた支援について、下記のように考えました。

困り感の実態に応じた個別最適な支援の例

○　教材を理解する際

子どもの困り感の例		個別最適な支援の例
物語の流れが分からない	⇒	ナンバリングして教材を提示する
登場人物の関係が整理できない	⇒	登場人物の関係を図式化する
教材の言葉の意味が分からない	⇒	教材をスライドにして注釈を入れる

○　考えを共有する際

子どもの困り感の例		個別最適な支援の例
恥ずかしくて発言できない	⇒	ネームカードで意思表示する
仲間の考えを理解できない	⇒	円グラフやスケールを活用する
自分の考えを整理して伝えることができない	⇒	シンキングツールを活用する

○　考えを表現する際

子どもの困り感の例		個別最適な支援の例
何を書いてよいか分からない	⇒	書き始めの話型を提示する
記述して表現するのが難しい	⇒	表情絵やイラスト、色で表現させる
短く表面的な言葉で終わってしまう	⇒	登場人物への手紙形式で記述させる

このような個別最適な支援を取り入れた「誰もが安心して考えることができる道徳科の授業」を提案します。

第５学年１組　道徳科学習指導案

令和４年 10 月 28 日（金）　第６時限（５年１組教室）　指導者　石原　聖也

１　主題　　きまりの意義（Ｃ規則の尊重）

２　主題のもつ魅力について

高学年の児童にとって、日常生活を送る上で必要な法やきまりを理解して守っていくと共に、自他の権利を大切にしようとする気持ちは、他者と共に社会を生きていくために必要である。しかし、児童を取り巻く今日的な課題に、社会的な規範が揺らいでいるということがある。時には大人の姿を通して、児童が法やきまりの重要性を希薄に感じることがあるかもしれない。さらに、社会が多様化する中で、今まで当たり前であった身の回りのきまりについては、考え直す必要性が叫ばれることも増えてきた。

そのような現状の中で、自分自身の生活を見つめ直し、改めて法やきまりがなぜ存在しているのかを考え、その意義を理解させることで、遵法の精神をもってよりよい生き方をしようという意欲につなげていきたい。それと共に、他者の権利を尊重し自分の権利を正しく主張することで、周りの人と共によりよい社会を築こうとする意欲にもつなげていきたい。

３　取り上げる主題について

(1)　評価について

一面的な見方から多面的・多角的な見方へ	自分自身との関わりの中で深める
・　他者の考えを共有するなどの活動を通して、きまりを守ることの意義や必要性について、自分の考えと違う友達の考えを理解しようとし、様々な視点から考えようとしている。	・　教材文の内容や友達の考えを聞くことを通して、日常生活と関わらせながらきまりについて考えている。そして、どのような思いを基にきまりを大切にしていきたいかを自分自身のこととして捉えている。

(2)　関連する主題

小学校４年	小学校５年	小学校６年
「みんなが気持ちよく」	「きまりの意義」	「法やきまりを守って」

(3)　主題と児童の関係

本学級は、在籍する児童のうち全体の３分の２程度を外国籍の児童が占めており、日本語の理解に関わる実態は様々である。また、生活環境や文化が異なっている児童は、当然大切だと思うことや、出来事に対する捉え方、考え方にも違いがある。この児童が、一つの集団の中で人間関係を形成し、共存するためには、自分の思いのままに行動するのではなく、きまりを守ったり自他の権利を尊重し、義務を果たしたりしようとすることはとても重要だと考え、本主題について共に考え議論することは意義深い。

本学級の児童の中に顕在化していたきまりについての考えは、十分に深まっていない様子が見てとれる。年度当初に行った道徳科に関するアンケートの中では「これまでの生活の中で、きまりがあることのよさについて考えたことがあるか」という項目

に対して、20 人中 11 人が「あまり考えることができていなかった」と回答した。さらに、日常生活において、互いの行動においてきまりを守っていない様子を見付けると「先生に言うからね」などという発言がしばしば見られた。このアンケートの結果と実態からは、「きまりを守るべきである」ということを知識として知っているが、「なぜきまりを守らないといけないのか」ということまでは理解できていないということが分かり、価値の理解が不十分であるという実態を把握することができた。

学習指導要領の第５学年及び第６学年の目標は「法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと」であるが、日本語の習熟に個人差がある本学級の児童の実態から、きまりの意義に焦点を当て「きまりは何のためにあるのかを考え、その意義や大切さに気付くことを通して、必要なきまりを進んで守ろうという実践意欲を高める」と本時のねらいを設定した。

４　本実践における実態に応じた個別最適な支援

○ 教材を理解する際

①「物語の流れが分からない」児童

教材文をそのまま読むのではなく、場面絵を利用してスライドショーを作成する。場面ごとにスライドを止めて、イラストを拡大したり記号で注目させたりすることで、臨場感を出して、物語の展開を理解することができるようにする。

②「登場人物の関係や場面設定が理解できない」児童

スライドショーに言葉の注釈や、登場人物の名前などを取り入れて、視覚的に補えるようにする。

○ 考えを共有する際

③「言葉や文字で表現することができない」児童

登場人物の気持ちについて、表情絵を提示して選択させることで、自分の考えを表現することができるようにする。また、グループで話し合うことで、自分の考えと近い考えの児童の発言を聞いて、どのような言葉で表せばよいかを理解させ、自分の考えを少しでも表現できるようにする。

④「仲間の考えを理解できない」児童

表情絵をロイロノートの共有画面で一斉に表示することで、学級の児童の考えを素早く共有し、その画面を活用して互いの考えを比較できるようにする。

○ 考えを表現する際

⑤「何を書くのか分からない」児童

言葉での発問だけでなく、場面絵の表情に注目させて発問することで、登場人物の気持ちを理解させやすくする。また、表情絵を活用することで、文章を書くことが苦手でも、自らが考えた登場人物の気持ちを表現することができるようにする。

⑥「日本語で記述して表現することが難しい」児童

ロイロノートを活用してローマ字入力させることで、自分の考えを表すことができるようにする。また、学習活動４では、ワークシート等に記述するのではなく、言葉で伝え合う場面を設けることで、自分の思いを表すことができるようにする。

⑦「自分の考えが浮かばない」児童

複数の具体的な場面をイラストで提示することで、自分にとって身近で考えやすい場面を選び、自分の考えを表現することができるようにする。

5　本時の指導

(1) ねらい

きまりは何のためにあるのかを考え、その意義や大切さに気付くことを通して、必要なきまりを進んで守ろうという実践意欲を高める。

(2) 教材名　「お客さま」(出典：光村図書出版)

(3) 準備　教師：教科書のスライドショー、イラストシート（20 名分)、タブレット端末

ホワイトボード

児童：タブレット端末

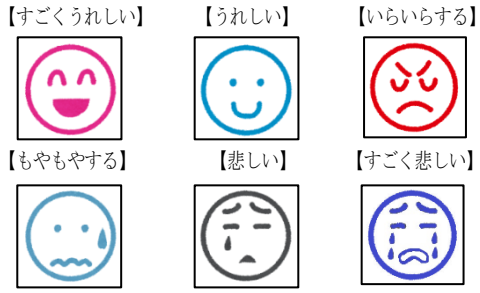
(4) 指導過程

時間	学習活動と予想される児童の様子	指導上の留意点（※　番号は、個別の支援に対応）
5 分	1　きまりを守ることについて、具体的な場面のイラストを見て考える。	○　日常の身近な場面の例を挙げることで、きまりについて考えさせ、今の考えを捉えることができるようにする。
	【発問】 ○　みなさんは、こんな場面を見たら、どう思いますか。 ・ラーメン屋さんの行列に長時間並んでいるときに、前のお客さんが友達を呼んで横入りさせていた。 ・公園でボールを使うのは禁止だけれど、サッカーがうまくなるために、誰もいない公園で練習している人がいた。	
	予想される児童の発言の様子 ・友達の人は並んでいないのだから、ずるい。 ・サッカーの練習をすることは、悪いことではないけれど、公園のルールだからだめ。	○　発問の場面をイラストでスクリーンに提示することで、場面の様子を児童が想起しやすく、自分の考えをもつことができるようにする。 ○　児童の発言に問い返しをすることで、きまりを守るべきかどうか判断に迷う場面もあることに気付かせる。 ○　権利があることも確認することで、児童の考えを揺さぶり、本時のめあてに興味をもたせる。
	本時のめあて：どうしてきまりはあるのでしょう。	
20 分 (5 分)	2　教材「お客さま」を読んで、わたしの気持ちを中心に話し合う。 (1) スライド形式の範読を聞く。	○　教材の場面絵をスライド形式で提示し、せりふの吹き出しや状況の注釈を入れることで、児童が登場人物の関係

		や場面設定などを正確に理解できるようにする。（②） ○　場面ごとにスライドを止めて、状況を説明したり、アニメーションを活用して強調したい人物や気持ちは拡大して表示したりすることで、児童が教材の流れを理解できるようにする。（①）
(5 分)	(2) わたしが、どんな気持ちになったのかを考えて、表情絵で表す。	

【発問】
○　次の場面で「わたし」は、どんな気持ちになったでしょう。

6 種類の表情絵



○　「すごくうれしい」「うれしい」「いらいらする」「もやもやする」「悲しい」「すごく悲しい」の６種類の表情絵を提示して選択させることで、発問に対する自分の考えを表現させやすくする。（③、⑤）

○　ロイロノートの共有画面で全体の児童の表情を比較（④）し、その表情を選んだ理由を簡単に聞くことで、そのときの主人公の気持ちを共有することができるようにする。

○　ロイロノートの共有画面を見て、場面ごとに多かった表情絵を、教師が黒板に貼って示す。

① 遊園地にきたとき

予想される児童の表情絵
・すごくうれしい　・うれしい

予想される児童の発言
・わたしは、ショーを見るのをすごく楽しみにしているから。

② 男の人が肩車をしたとき

予想される児童の表情絵
・悲しい・もやもやする・腹立たしい

予想される児童の発言
・男の子はショーが見えるけれど、わたしはショーが見えなくなってしまった。
・男の人は、自分勝手だなと思った。

○　ここでは、わたしが「悲しい」気持ちになった一方で、男の人はうれしい気持ちになっていることに気付かせることで、二人の気持ちに大きな違いがあることを捉えさせる。

(10 分)	(3) わたしの気持ちが晴れなかった理由について考える。	○　「気持ちが晴れない」という言葉は、「なんだかもやもやしている」という気持ちを表す言葉であることを、確かめる。

【中心発問】
○　なぜ、わたしの気持ちは晴れなかったのでしょう。

	予想される児童の発言 〈見えなかったことについて〉 ・楽しみにしていたのに見えなかった。 ・他の人は見えてうらやましい。 ・一部の人が損をしている気がする。 〈男の人に対して〉 ・自分さえ良ければなんて、ずるい。 ・我慢している人もいるのに、自分勝手。 ・お客様だけど、私もお客様。	○　ショーが終わった場面のわたしの表情に着目させて発問することで、気持ちが晴れない主人公の心情を捉えやすくする。(⑤) ○　男の人を批判する意見や、「お客様」という言葉が出たら、男の人も「お客様」であることに気付かせ、「男の人や周りの人の言うことは正しいのでは」と問い掛け、男の人にも権利があることについて考えさせる。
	児童の意見に問い返す発問 「お客様って、誰のことだろう」 「お客様だから、男の人と周りの人の言っていることは正しいのではないかな」	○　多くの人がよい気持ちになっても、一部の人（わたしなど）が笑顔になっていない状況を数枚の表情絵を使って表すことで、みんなが笑顔になっていない状況であり、良い状況ではないことを捉えることができるようにする。
10 分	3　全ての人が笑顔でいるためには、どんなことが大切なのかを考える。	
	【発問】 ○　みんなが笑顔になるためには、どんな考えが大切なのでしょう。	
(5 分)	(1) グループで考えを出し合う。	○　まずは３人組のグループになって、ロイロノートの「共有ノート」を活用して考えを出し合わせる。(③) ○　タブレットを活用しローマ字入力させることで、文字を書く活動が苦手な児童も自分の考えを表現できるようにする。(⑥)
(5 分)	(2) 全体で考えを出し合う。 予想される児童の様子 ・周りの人のことも考える。 ・自分だけがよい気持ちになればいいと思わない。 ・自分勝手に考えない。	○　ある程度考えが出たところで、わたしの表情絵を「うれしい」に変えて黒板に貼ることで、最高の度合いではなくても誰一人欠かすことなく、よい気持ちでいることが大切であることを感じ取ることができるようにする。 ○　「お客様」という立場上、ショーを見る権利は誰にでもあるが、女の子も含め遊園地に来ている人全てが「お客様」であるため、この場ではみんなのことを考えて、きまりを守ることが大切であることに気付かせる。

10分	4　自分自身との関わりの中できまりに対する考えを広げる。	
(5分)	(1) きまりに対する自分の考えを表す。	

【発問】
○　「どうしてきまりはあるの」と聞かれたら、なんと答えますか。

例示する場面のイラスト
・ラーメン屋さんの列への横入りをしている人
・サッカー禁止の公園でサッカーの練習をしている人

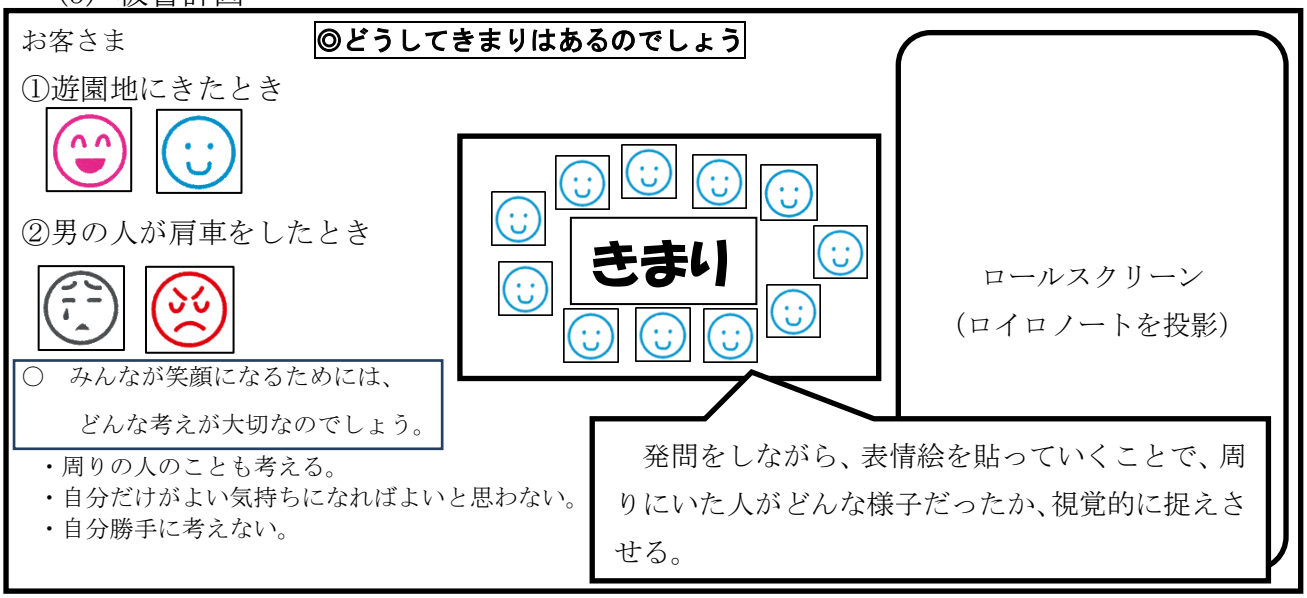
○　例示した場面において、もし自分が声を掛けた際に「どうしてきまりはあるの」と聞かれたらなんと答えるのかについて、考えさせる。
○　吹き出し型のイラストカードを準備することで、自らの考えを表現しやすくする。(⑤)
○　学習活動３で板書した学級全体の考えの中から良いと思った言葉を選んで使ってもよいことを伝えることで、考えを表現できるようにする。(③)
○　複数の場面をイラストで提示することで、児童が自ら考えやすい場面を選んで表現できるようにする。(⑦)

(5分)	(2) グループで考えを出し合う。	○　グループ活動では、イラストカードを持って、自分の考えた返答を伝える。(⑥) ○　グループで考えを出し合った後は、学級全体で何人かの児童に考えを発表させる。

本時の終わりに期待される具体的な児童の姿・考え：
・きまりは誰か一人だけのためではなくて、全ての人を守るためにあると思います。
・周りの人が困ったり嫌な思いをしたりしないために大切だと思います。
・きまりがないと、嫌な気分になる子がいると思います。みんながきまりを守ると、もめたりけんかになったりすることが少なくなると思います。

評価事項
　きまりは何のためにあるのかを考え、その意義や大切さに気付くことを通して、集団生活のために必要なきまりを、進んで守ろうという実践意欲を高めることができている。　【記述・記入・発言】
□･･･例示した場面のイラストの中で、興味がある場面はどれかを選ばせて、なぜ、その場面のきまりが大切であるのかを考えさせて、イラストに○を記入したり、イラストの近くに考えを簡単に記述させたりするようにする。
☆･･･例示した以外の場面も想起して記述してよいことを伝え、その場面が、自分たちの将来の社会、どのような場面につながっていくかを考えられるようにする。

(5) 板書計画

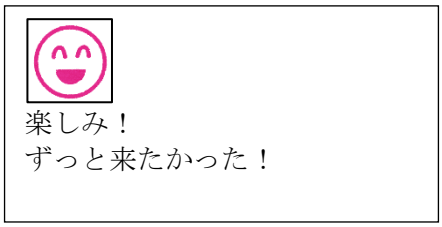


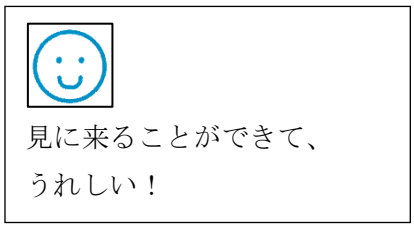
※　ロールスクリーンとは別に、スライド投影のためのホワイトボードを用意する。
※　児童の考えは、ロイロノートで共有する。

(6) 学習活動２のロイロノート画面

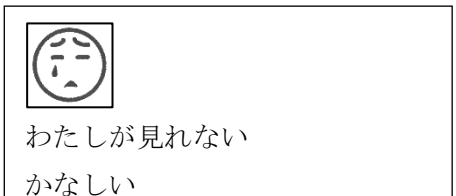
※　言葉で表現することが苦手な児童は表情絵を選ぶだけでもよいことにする。

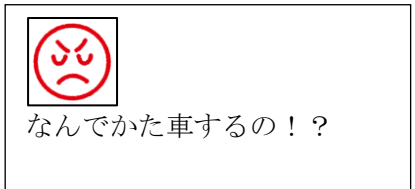
①　遊園地にきたとき





②　男の人が肩車をしたとき





(7) イラストカード

※　以下のようなイラストを２場面提示する。

○　自分が声を掛けた際に、「どうしてきまりはあるの」と聞かれたら、何と答えるかを考えさせる。

（8）教材文

お客さま

楽しい音楽が流れる中、わたしたち家族は、遊園地でショーが始まるのを待っている。
今日のショーは、わたしの大好きなキャラクターが出演するのだ。わたしは夢中で父と母にキャラクターの話をしながら、期待にむねをふくらませていた。
しばらくすると、どんどん人がやって来て、人と人の頭の間からのぞきこむか、せのびをするかしないと、ステージを見ることができなくなってきた。わたしたちの後ろにも、たくさんの人たちがショーの始まりを待っている。花だんのフェンスに登って待つ人も出てきた。係の人がやって来て、
「あぶないですから、フェンスに登らないでください。」
と、注意している。それから、
「ショーの間は、お子さんをかた車したり、ビデオやカメラを頭より上に持ち上げたりしないようにしてください。」
と、何回も大きな声でよびかけている。
周りの人たちは、
「そんなこと言ったって、これじゃあ、よく見えないし、写真もとれないぞ。」
と不満げだ。

いよいよ、ショーの始まりだ。ところがしばらくすると、わたしたちの前に立っていた男の人が子どもをかた車した。おかげでわたしは、ショーが全く見えなくなってしまった。
「お客さま、かた車はおやめください。」
と、係の人が注意をした。
「でも、うちの子がよく見えないんですよ。」
「あぶないですし、後ろのお客さまのご迷わくにもなりますので――。」
そう言われても、男の人が、かた車から子どもを下ろそうとする気配はなかった。
「お客さま。かた車はごえんりょいただいております。すぐに下ろしてください。」
男の人は、ようやく子どもを下ろしたが、むっとした顔で係の人に言った。
「なっとくできないな。わたしたちはお金をはらって入場しているんです。お客さまなんですよ。」
わたしが、びっくりしてその人の顔を見たとき、
「そうだ、そうだ。」
と、男の人に同調する声が出始めた。ショーは楽しい音楽に合わせて続いているのに、わたしたちの周りは、いやな空気がただよっている。

係の人は、
「申しわけございません。ご協力ありがとうございました。」
と、頭を下げた。
ショーが終わり、多くの人は「楽しかったね。」と、えがおで帰りじたくをしている。でも、わたしは気持ちが晴れないまま、その会場を後にした。
わたしは、今日自分たちの周りで起こったことを、もう一度考えていた。

出典：光村図書出版『きみがいちばんひかるとき』5年